

川音 勉



2008年5月18日「来るべき自己決定権のために」シンポジウム
於、沖縄県立博物館・美術館講堂

同志 畑中文治（川音勉）を追悼する

二〇一三年九月

共産主義者同盟首都圏委員会

なんという困難な課題であろうか、君の追悼文を書かねばならないとは！

「復活する！」という君の言葉が私たちの記憶の中に今も鮮明に残っている。その言葉は死の約一ヶ月前、七月七日に君が発したものだ。君は、昨年十一月の食道癌手術、その後、転移が確認された癌細胞をたき潰すための出来うる限りの治療を受け入れた。復活するという言葉の意味は「まだ死を受容するわけにはいかない！」という癌との闘争宣言であったのか、「心配しなくて良いよ、復活してみせるから」という周囲への優しい心配りの発言だったか、今や聞く術もない。意識の明瞭さを維持するために最小限の痛み止めで激痛に耐えていた君の最後の日々は、癌に侵された肉体と、生きようとする精神の壮絶な闘いの連続だった。

川音勉同志は、高校生時代から活動家として頭角を現し、執拗なこだわり、思想・哲学・歴史・経済、分野を限らない旺盛な読書欲、サブカルチャーや文学、芸術、映像領域

七〇年代の組織分裂と統合の時代を私たちと共に駆け抜け、四〇年以上、資本主義・帝国主義をこの世界から一掃するための共産主義運動に邁進してきた。君が担つてきただけが大き過ぎて、稚拙な文章では、君を語り尽くすことはできない。活動家にありがちなひとりよがりの文章を「当事者にしか理解できない悪文」と切り捨てる君の表現は、流麗かつ平易な独自の文体に昇華し、読み始めから結語まで畳み掛けるように、切れ味鋭く、読後感は暗雲立ち込める中で、地表から雲間へ駆け上るうとする一筋の光を感じさせるものだった。その伶俐な文体の中にも醸し出される思想的謙虚さは、日常生活や活動の現場での人との出会いを何よりも大切にする、君の人柄そのものだったようにも思える。

君の文章から、こんな一節を見つけた。「現実的諸実践の教訓を、もう一度原理の側に回収するプロセスが不可欠であり、本を読んであれこれ頭で考える作業だけではできない。活動の現場に赴き、仲間との共同の実践を理論化する作業の堆積が必要とされる。」（情況二〇〇七年三・四月号「沖縄自立経済・再考」）大小の集会やデモ、米大使館や防衛省前、総理官邸前行動、沖縄現地闘争など、〈現場〉への執拗なこだわり、思想・哲学・歴史・経済、分野を限らない旺盛な読書欲、サブカルチャーや文学、芸術、映像領域

への幅広い関心。これらは、現代世界と社会、そして何よりもそこで生きる人間存在をトータルに捉えようとする君の流儀であり、共産主義者としての生き様そのものであり、理論と実践を結びつけた君の活動スタイルが、我々の〈党〉の形をつくりだしてきた。

我々が共に模索し目指したものと君の残した文書からさらに引用することで、道半ばで倒れた君の姿の一端を伝えたい。

昨年來準備してきた「サンフランシスコ講和条約⁶⁰〔1951年〕」を考える東京・沖縄連続シンポの企画を、君は最後まで見届けようとした。体力を徐々に奪われつつある中で、実行委員会を組織し、レジュメを提起する君の思いが、我々にも伝わってきた。〈沖縄問題〉を日本の戦後史、さらには、東アジアの近現代史の中で捉え直すこと。それが企画に込めた狙いであり、沖縄の自己決定権に向かい、東アジアの民衆連帯の可能性を展望すること、「東アジア諸地域、諸国」の歴史的経験を、近代史にさかのぼり検証し、プロレタリアート民衆の次元で共有し、相互理解を進め、連帯して東アジアそのものを自ら統治する、そのような主体を立ち上げること」（4・28反戦行動への連帯アピール）が、君の一貫した問題意識だった。「東アジア、環太平洋列島社会、ネシアのスケールで資本主義を覆し、帝国主義を打倒、掃除する革命をやろうということだ。」〈沖縄と日本社会の階

級闘争を大きく掘む観点を、沖縄人民との共同によって獲得することがわれわれの願いである。それはとりもなおさず、東アジア、環太平洋のスケールで資本主義・帝国主義の近代を根こそぎ転覆することの緒につくことでもある。」（沖縄自立経済・再考）「国家障壁と資本の利潤追求の論理を越えて人々の直接の経済・社会的結合を促し、歴史を自在に往還して現存国家の統合論理からあふれる民衆連帯の発話をより合わせる作業の中で、この地域に生きる人々の共同の歴史的社會的認識を形成し、これを基礎に、日本・東アジア、さらに地球大の規模の人々の意思と力によつて九条改憲を粉碎すること、ここから東アジアの新しい民衆連帯の時代を展望することがわれわれの願いである。」（情況二〇〇八年五月号「沖縄の〈自己決定権〉に向き合う、日本の主権性創発のために）これらの硬質な文体の中に、進る安保・沖縄闘争への思いが溢れていた。

君が私たちと共に目指したものは、君が提起し共有化してきた同盟の基本文書「共産主義運動のためのテーゼ2004」に結実されている。すでに九年を経過し、その間の世界規模の大きな政治経済情勢の変化を考えれば、今日本的に書き改める必要があることは言つまでもない。君も、本年三月十六日の「赤ブロ」政治討論会への呼びかけ文で、最後の気力を振り絞るように書いている。「来るべき七月参

議院選挙を、一つの節目として、さらなる政治的社會的活動が予測されます。」「この情勢の中で共産主義運動が、反貧困・脱原発・沖縄連帯の大衆行動を推進しながら、何を提起し、事態にいかに介入し、その主体をだれが構築していくのか？資本主義、帝国主義と闘う左翼の広範で、強力な團結が求められています。」

しかし、執筆時点の時代的限定期を持ちながらも、「dez 2004」の基調は、私たちの基本指針であり続けていく。特にテーゼ冒頭に掲げた「ド・イデ」の引用「共産主義」というのは、僕らにとって、創出されるべきひとつ状態、それに則つて現実が止ざるべき一つの理想ではない。

僕らが共産主義と呼ぶのは現実的な運動、現在の状態を止揚する現実的な運動だ。この運動の諸条件は今日現存する前提から生ずる」そしてガタリ・ネグリの「自由の新たな空間」の引用「共産主義とは個人的かつ集団的な特異・固有性を解放する試みである。」二つの引用から始まる「運動としての共産主義」及び、「リゾームないしセミ・ラティスのタイプの組織であると同時に、政治の闘争原理に基づく戦闘組織としての要素をも持つ、二重理論によって構成される」（党）のイメージ、そして「三つの組織活動指針」〔①次世代共産主義運動を組織する。②ネオ・ポストマルクス主義思想潮流の形成を促す。③非權威主義的左翼の結集とその政治的ヘゲモニー装置としての確立をめざす。」は現在

も私たちの基本的指針であり、この間、我が同盟が活動家諸氏と共に進めてきたMR研究会などの理論研究活動、および「共産主義運動年誌」・共産主義者協議会による政治組織活動などを通じた共産主義諸潮流との交流・連携・団結、統一戦線、左翼の刷新と再生の摸索がその具体化でもあつた。

君の死によつて少し余計に時間がかかるうと、「今やみずから政治的統治力量の枯渇に至ろうとしているわが国支配階級を凌駕」（テーゼ2004）すべく、引き続き奮闘していくことを誓う。

高校生時代のボート部で鍛えられたという、君の強靭な心臓が鼓動を止める間際まで、君の脳裏には共産主義運動についての考察があふれ、文字となつて絞り出される時を待つていたのではないか。共産主義運動の未来への自らのこだわりを、「それが病氣」と病床で語った川音の諧謔にもあまりにも早すぎる死であった。合掌
二〇一三年八月三日 川音勉同志逝去 享年六〇歳

本追悼文は「赤いプロレタリア」に掲載したものである。

日米安保粉碎・安倍政権打倒4・28反戦行動への連帯アピール

二〇二三・四・二八

畠中文治（沖縄文化講座）

4・28 沖縄連帯・反戦行動への闘うメッセージと、闘う仲間の皆さんへの熱い連帯の挨拶を送ります。

サンフランシスコ講和条約、旧・日米安保条約が発効した一九五二年のこの日を、沖縄民衆は「屈辱の日」としてとらえて闘い続け、また私たちもこれに連帯し日米安保体制を粉碎するため闘つてきました。そして本年本日は、改憲をめざす安倍政権が、「主権回復の日」として政府式典を行うことによって、新たな反動的な位置づけを与えられることになりました。

いわゆるアベノミックスと称する経済政策は、リフレ派金融政策と国際大独占の利益に奉仕する財政政策の混合物にほかなりません。一握りの富裕層による富裕層のための政策であり、

それゆえ、マスメディアは口をそろえてほめそやし、その恩恵にあずかる一部の企業や株主たちは、当座の利益確保に奔走しています。だが、こんなことが長続きするはずもないでしょう。すべては七月参院選挙で与党過半数を実現し、衆参のねじれを解消するまでの、人気取りの政策にすぎません。

他方、政権への高支持率に慢心してか、本来の突出した右翼的反動的政治性格は、日々明らかになっていきます。本日の「主権回復の日」政府式典強行はその最たるものです。琉大名譽教授・比屋根照夫さんはこれを「戦後沖縄の思想史的事件」として強く批判しています。サンフランシスコ条約第三条は琉球諸島を含む南西諸島を米国の信託統治下に置くこと、つまり米国

に売り渡すことを決め、この条件＝代償のもとに日本の独立が承認されたのでした。そして安倍政権は、この歴史的事実を何の屈託もなく受け入れ、「日本の主権回復の日」として記念するというわけです。まさに日本帝国主義イデオロギーの猛威というほかありません。七二年第三次琉球処分以来、二一世紀の現在に至るまでの、差別軍事支配、国内軍事植民地支配をそのまま肯定し、天皇の臨席のもとに、国家・政府として記念したのです。比屋根さんに限らず、沖縄の少なからずの人々が、怒りと一口二一を込めて、これを日本国家の新たな沖縄差別宣言と受け止め、「戦後沖縄の思想史的事件」といいあらわしたのです。では、翻つて日本社会の私たちはこの事態を、「戦後日本の思想史的事件」として受け止めているでしょうか？

ここで、「主権回復の日」にかかる安倍政権の逐一の言動についての政治暴露、その背景としての全般的な情勢についての、私たち自身による記述は、本日の行動に参加結集した仲間の皆さんのご指摘に譲ります。日米帝国主義に反対し、沖縄民衆の闘いに連帯する活動を積み重ねてきた多くの心ある仲間たちと私たちには大きく異なる認識を持つわけではありません。

私たちが本日の行動に際して2つだけ、できるだけ要点を絞つて申し上げます。一つは、「主権回復の日」を日本社会でどのように受け止めるかということです。沖縄タイムス社と琉球朝日放送による沖縄全県での世論調査（本年四月一三日（一九日に実施）によれば、約七割の県民が「主権回復の日」式典・

政府開催を「評価しない」と否定的にとらえていることが明らかになっています。その最も多かつた理由は「沖縄にとつて屈辱の日だから」の53・9%、次いで「沖縄の主権は回復しているとは言えないから」の39・7%。他方、日本社会を対象とした世論調査（JNN三月9、一〇日実施）では、賛成36%、反対33%、わからない32%という数字になります。「ここでも日本社会の意識との大きな断絶が明らかです。この日本社会の反応は、事態への賛否以前に、沖縄戦後史についての理解を欠いていることを示すものではないでしょうか？」また、「屈辱の日」ととらえる沖縄県民輿論も、五〇年代当時、島ぐるみの「復帰運動」を促したようなメンタリティとはやはり質的な違いがあるようになります。「復帰」41年、とりわけ九五年以来の辺野古新基地建設を阻止する、「県」行政そのものを巻き込んだ日本政府とのせめぎあいの中から、沖縄の人々は日本国家の現実を身をもつて知られてきました。もはや日本国家に何かを求めてむなしいといふことが明らかになったところから、沖縄の人々の闘いは改めて進められつつあるように見えます。島袋純・琉大教授は次のように言っています（『タイムズ』一三年四月二十四日）。「日本国は4・28式典で沖縄を『日本』の『主権』『民族』から外に放り出す。第三の道は、日本により放り投げられてしまつた主権や民族を沖縄が受け取り、自ら基本的権利を守つていくため自分たちのものとして再構築していくこと、そのために立ち上がりしていくことである。」（ちなみに第一

ナショナリズムの論じ方—そのラフスケッチ

畠中文治（共産諸同盟首都圏委員会）

◎はじめに

タイトルは当初、「民族問題ノート…ドイツ革命論のトルソ（レーニン『民族問題ノート』とスターリン評価を含めて）」というようなものにするつもりだったが、記述の冒頭から、不都合なことが分かった。その理由は、読み進めていただければわかることなので、ここでは取り上げない。

「ノート」をまとめようというきっかけは、さしあたり二つほどあった。一つは、本誌第七号に掲載された阿部治正さんの『書評』（『民族とは何か』 関曠野 二〇〇一年一二月刊）であった。

この『書評』には、「民族主義や民族国家は、商品経済や近代産業や民主主義や豊かな文化や労働者・民衆の政治的成長のための防波堤、その母胎となることによって、同時にそうした資本の時代、民族国家の時代を相対化し、それを乗り越えていくこうとする人々のチャレンジを生みださざるを得ない。つまり自由で自立した労働者、そうした労働者の社会的連帯、労働者たちによる既存体制に対する対抗運動、対抗社会の形成のための運動の発展」。

「民族を越えようとする市民的・労働者的連帯の試み、労働者の国境を越えた共同と連帯の発展による『民族の止揚』」という課題（『年誌』第七号二〇九ページ）などの正しい批判的指摘がある一方で、関曠野さんの問題意識を捉えそこねて、重要な論点の見落としがある。

沖縄　一読書（アジアと民族）琉球独立論

マルクス主義民族理論の特殊性

東欧型、ロシア型、オスマン帝国
オーストリア、オーストロ・マルクス主義

ユダヤ人問題

民族問題の論じられた

マルクス～スターリン

民族問題における実在論と実念論
歴史総括論

の道は沖縄自民党が植民地主義政党として生まれ変わること、第二の道は自民党以外の政党であり国民統合の論理により、同じ日本人として同じ権利を求めるがもはや承認されない。すべての軍事基地撤去、平和で豊かな暮らしを勝ち取る、聞いを進めることは、自己決定権の行使、自立解放の道を歩むことにはかならないでしょう。

問題は、こうした沖縄民衆の聞いに向き合い、連帶するためには日本社会の私たちの聞いをどうしたらいいのかということです。ともに日本国家の右傾化に抗し、九条をはじめとする戦後民主主義の精華を守るというレベルに止まるものではないでしょ。

二つ目は、「主権回復の日」式典強行の背景とも考えられる「尖閣諸島領有問題」をやはり日本社会でどう考えるかということです。その際、当該地域・海域を生活圏とする生活者・住民の意思が、先ず最後に尊重されなければならないこと、これは大前提です。琉球と、明・清との朝貢関係に伴う交易に際しての航路標識として使用されてきたことからして、ヨーロッパ帝國主義由来の無主地先占論は問題になりません。そのうえで、これにかかる諸地域、諸国のプロレタリアート民衆の歴史認識と政治意思が問題になります。私たち日本社会に引きつけて言えば、これは、一つ目の問い合わせあることが分かります。日本社会の中で、私たちは、沖縄や他の東アジアの人々と同様にプロレタリアート民衆としての自己決定権の行使が求

められています。ただその直面する課題はそれぞれに特殊具体的です。私たちの場合、天皇制と日米安保体制が第二次世界大戦の戦争・戦後責任清算の不徹底の結果として、現在に至るまで重くのしかかっているわけです。その矛盾は尖閣諸島をはじめとして「竹島問題」、「北方領土問題」として顕在化しています。東西冷戦体制の解消、とりわけ中国の政治的軍事的経済的伸長という新しい東アジアの情勢が、その背景となっています。この日本の領土問題は、南北朝鮮問題、中国・台湾の分割の問題、さらに言えば、沖縄・琉球の国家的主権喪失の問題と同質の問題をはらんでいるのかもしれません。だからこそ東アジア諸地域、諸国歴史的経験を、近代史にさかのぼり検証し、プロレタリアート民衆の次元で共有し、相互理解を進め、連帯して東アジアそのものを自ら統治する、そのような主体を立ち上げること、ここに私たちの遠い目標があります。

このことを考え、政治態度を整えるために、私たちは本日の東京シンポを準備してきました。多くの仲間が参加され、共に考え、闘うための良い機会となることを希望しています。仲間の皆さんとの変わらぬ團結を誓つて、私たちからのアピールとします。

ユダヤ人問題の再検証

レーニンの民族問題の諸事情と守備範囲

ユダヤ人ブント

ローザ・ユニウス

民族自決論とロイとの論争

グルジア問題、スターリンとの対決

民族問題へのアプローチ

ナショナリズム論

アントニー・D・スミス ⇄ ゲルナー

マルクス主義民族理論の系譜

カウツキー、オーストロ・マルクス主義、スターリン（田中克彦）

レーニン（ノート、民植テーゼ、東方テーゼ）

マルクス主義民族理論・論史

白井朗（2冊）

アイデンティティ・ポリティックスとしての民族

サバルタン、オリエンタリズム

ナショナリズム（大沢真幸）

松島泰勝～野村浩也（鶴見和子『内発的発展論』）

本稿は川音勉【畠中文治】の遺稿とも呼べる「メモ」である。原稿締切日を念頭において、彼らしく、読書ノートの作成から必要な文献整理を闊病中も続行。

文字通り心血を注いだ「4・28 東京 - 5・18 那霸」のシンポジウム（『情況』2013年7-8月合併号に報告が掲載）準備はもとより、別掲の「4・28 反戦行動への連帯アピール」も書き上げていた。激痛に悩まされながらも、鎮痛剤服用は思惟回路が混濁するが故に、極度に抑さえてもいた。4・28 当日は、朝から一坪反戦・関東ブロックの抗議集会、午後は先の反戦闘争実の集会、そして夜からの「東京シンポ」と、おぼつかない足取りで参加していたことは多くの友人の知るところだろう。

そして、病態急変以降、一日一行と思われるベースで書き綴ったのがこの「メモ」である。彼は、自ら書き上げた論攷に対しては常に「完成度が低い！」というのが口癖だったが、若干の逡巡の後、このメモ書きを「読書ノート」とともに我々に手渡したのが7月29日だった。